



荻原 守衛(碌山) OGIHARA, Moriye (Rokuzan)

1879(明治12)年12月1日 - 1910(明治43)年4月22日

1879(明治12)年12月1日、農業を営んでいた父 勘六、母 りょうの5男として、現在の長野県安曇野市穂高に生まれました。

1893年、東穂高高等小学校卒業後は、家業の農業に従事します。翌年、東穂高禁酒会の会員となり、相馬愛蔵や井口喜源治らに強く影響を受けることになりました。

1897年、相馬愛蔵・黒光夫妻の家で長尾奎太郎の《亀戸風景》を見て感銘を受けます。荻原が目にした初めての油彩画でした。1899年頃より頻繁に相馬家へ出入りするようになり、蔵書を読んだり、黒光と親交を結ぶことによって文化的知識の幅を広げていきます。同年、巖本善治を頼って上京、小山正太郎の画塾「不同舎」で絵を学びます。

1901年に渡米を決意し、4月5日にニューヨークへ到着しました。はじめの半年ほどは放浪の苦しい生活を送っていましたが、10月、資産家フェアチャイルド家の学僕となり、アート・ステューデントズ・リーグに入学。この頃、生涯の親友となる戸張孤雁と知り合いました。

1903年10月、渡仏。翌年、アカデミー・ジュリアンに通い、J. P. ローランスにデッサンを学びました。パリでは、「不同舎」の先輩である中村不折と親交を結びます。荻原はこの年、春のサロンでロダンの《考える人》を見て感動し、彫刻家になる決意をしました。そして一時ニューヨークへ戻り、その時、柳敬助から高村光太郎を紹介されます。1906年に再度パリに渡り、アカデミー・ジュリアンの彫刻部で学ぶ傍ら、しばしばロダンの元を訪れて教えを受けるようになりました。この頃に斎藤与里と知り合っています。

そして1908年に帰国。新宿の角筈つのはすにアトリエを構えると、留学中に知り合った戸張、柳、高村、斎藤をはじめ、新たに中村彝、中原悌二郎、鶴田吾郎らが訪れるようになります。やがて彼らは、荻原のアトリエ近くに本店を構えていた中村屋に集い、初期の中村屋サロンが形成されていきます。また荻原は、黒光への許されない愛に苦しみながら制作活動に打ち込み、1910年3月、傑作《女》を完成させました。しかし、同月20日、柳のためのアトリエを中村屋裏に完成させた夜に喀血。4月22日に黒光夫妻、戸張に看取られて30歳で死去しました。